島崎藤村全集 21

筑摩書房

島崎藤村全集 21

昭和三十一年八月十日発行

定価 一九〇円

著者 島崎藤村

発行者 東京都千代田区神田小川町二ノ八 古田晁

印刷者 東京都三鷹市上連雀九九〇 今井直一

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八 筑摩書房

電話 東京(29)七六五一(代表)

振替 東京 一六五七六八

印刷 株式会社三省堂

製本 株式会社高陽堂

目次

明日……三
嵐……三
食堂……五
分配……一〇
＊
山陰土産……一三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

明

日

「その後のごぶさたをおゆるしください。あれからもう長い月日がたちますもの。相変らずお勤めのほうにおいそがしいことと思います。わたしもよくよくでなければ、こんな手紙はあげないつもりでしたが、どうにもこのごろは行きづまってしまいました……まことに済みませんがこの土曜の晩の八時ごろに池の端までおいでをねがいたく、七軒町の停留場のあたりにて待っていてくださるよう、くれぐれもおねがいいたします。こんな手紙をあげて、気持をわるくなさらないでください。このわたしの境涯をかわいそうとおぼしめしてください——何もおめもじの上。」

隼太あてに、おせんはこういう意味の手紙を書いた。おせんと隼太とはいとこ同士であるが、ずっと以前のように親しく交際することはおろか、手紙のやりとりさえも家の人たちに堅く禁じられていた。だれにも見られてはならないようなものであったから、おせんはこれを鉛筆で紙の上に手ばしこくしたためて、彼女が住む池の端七軒町の家の近くにあるポストへこっそり差し入れた。

池の端の静かな時だ。界隈の町では早く戸をしめて、宵の口になると人通りも少なかった。七軒町の電車通りのほうから響けて来る電車の音は、昼間の騒がしさにひきかえ、にわかに寂しくおせんの家まで聞えて来ていた。

ちょうど、おせんの家では父も栃木の郷里のほうへ出かけて行った留守の時で、やれ旅行用の毛布だ鞄だと言ったひとしきりの混雑のあとでは、いっそう家の内がひっそりとしていた。おせんは日の暮れるのを待ちかねるようにして、留守居するおばあさんや弟たちのため夕飯をつくったが、台所にいてもよく聞える電車の音にばかり気を取られた。

「おばあさん、ちょっとそこまで買物に行って来ます

から、お留守居をおねがいしますよ。」
とおせんは声をかけた。白いかさのはまった電燈は茶の間のこたつの上をしょんぼり照らしていた。そこにはおせんの弟たちのほかに、もう年をとって、どう孫たちのことを心配するでもないようなおばあさんが、みんなといっしょにこたつにあたりながら、すこし風邪の気味だというからだを暖めていた。
「ああ、そうかい。」
というおばあさんは別におせんの様子を怪しみもしなかった。いつでもおせんが町へ買物に出るのは、晩ときまっていたようなものであったから。
春の彼岸も近くて、暖かい雨はすでに幾度か池の端へもやって来たころであった。それでもまだ気候は寒さを繰り返していた。おせんは着古したコートの色も目立たないのに身を包んで、なにげなく家を出た。手にしたふろしき包みも、ただ申しわけばかりのようであった。足音のしないほど静かに、静かにと、地を踏んで行くのが日ごろのおせんの癖だ。彼女はそういう性質の女だった。その忍び足で、燈火もすくない町を通りぬけて、やがて七軒町の電車通りの明るいところへ出た。その辺はよく買物に来るところで、そこいらに見かける男や女の人たちはまるで自分とは別の世界でも歩いているかのように見えて来たほど、彼女の日常はそれほど生きがいのないものに思われていた。彼女はほとほと生きて行くということの興味すらも失いかけていた。このおせんが家の人たちに許されない手紙を書き、忍ぶように家を出、電車の停留場のほうに見える赤い灯を心あてにして、往来の人の中にいとこを捜すまでには、どれほどその小さな胸は抑えに抑えたものであったか知れない。
いとこは思いがけない方角から歩いて来た。おせんはすぐにその人を見つけて、いとこのほうでもこちらを捜し歩いていたことを知った。買物する人たちの出さかるころで、そこいらに店をひろげた足袋屋、水菓子屋の前あたりにはかなり人通りも多い。おせんは往来の人の目につかないような町の片すみにたたずんで

いて、近づいて来る隼太をそこに待ち受けた。
「おせんさん――」
それぎり隼太は物も言わないで、おせんの前に立った。三年も会わずにいた二人はしずかに顔を見合わせて、互に無量の思いに打たれた。
「おばあさんもお変りはありませんか。」
隼太の口からはまだこんな言葉しか出て来なかった。
往来の人を避けて、二人は同じ町の片側にある戸のしまった店の前へ移った。その辺は同じような商家の軒を並べたところで、近くの店先からさす強いガスの光は夜の街路の上に流れていた。おせんはそこにある空屋を背にして、いくらかでも暗いほうへと身を寄せ、隼太とさしむかいになるような位置に立った。驚き、喜び、人目を忍ぶ思い、そうしたいろいろのこころもちがいっしょになって、互の顔に映る楽しい灯影に入り乱れた。おせんは何から話していいかもわからなかったくらいで、しばらく言葉もすくない時をそこに送っていたが、自分の足もとに深い下水のみぞのあることにも気づかなかった。彼女は相手のほうにばかり気を取られて、思わずそのみぞの中へ足を踏み入れた。にわかな事に、隼太があわてて助け起そうとしたころは、おせんのからだはすでにみぞに落ちていた。
この物音に驚かされた近所の店の人たちの中にはそこへ顔を出したものもあった。さいわいにも下水はかわいていて、腐った溝板を踏みはずしただけのことで済んだ。着物もよごれなかった。けが一つしなかった。おせんは深いみぞから身を起して、コートについた土を払いながら、隼太のそばへ寄った。
「あぶない。」と隼太は慰め励ますように言った。「歩きながら話しましょう。そのほうがいい。歩いてさえいれば、だれもなんとも思やしません。」
優しく言ってくれる言葉に力を得て、おせんは隼太といっしょに七軒町の電車通りを池の端のほうへと取った。燈火の多い町が尽きるところまで行くと、そこはもう不忍の池だ。まだ震災以前のバラック一つな

い水辺には、薄暗い夜の空気を通してこちらを透かし見るようにしながら行き過ぎる人の影もある。おせんは楽しい思い出の多い三年前の自分に帰って、つい一時前のきまりの悪かった失策をも忘れた。

話すなら今だ、買物すると言って家を出て来たものにはおおよそ時の限りがある——その心は、おせんにも隼太にもあった。しかし、隼太のほうでもまだその話の糸口を見いだしかねたかのように、

「でも、こんなにしてよく出て来られましたね。」

「ええ、このごろは。ホラ——あの話のあった時分ね。隼太さんもお聞きでしたろう。わたしがおとうさんに断わっちゃったでしょう。あの時分にはひとりでそとへも出られませんでしたよ。二郎ちゃん（おせんの弟）でも連れなければ、広小路までも行かれないくらいでしたよ。……ほんとに、こんなにして出歩かれるのはこのごろです……おばあさんも、このごろはそんなにやかましく言いません……。」

それを聞くと、また隼太は黙って歩き出した。おせんも黙って歩いた。「そんなにおせんさんは行きづまっているんですか。ぼくはおせんさんがもっと平穏に生きているのかと思った。そのあわれな境遇にもっと静かにしているのかと思った。」——この隼太の無言な声は、言わず語らずのうちにおせんの胸に伝わって来た。

歩けば歩くほど、二人は親しい心持を引き出された。星のすがた一つ見えないような晩で、春の寒さは二人の頬へ来たが、それがかえって快感をさえ覚えさせた。

隼太はすこし立ちどまって、

「おせんさんもそれほどしんぼうしたらたくさんでしょうに。どうです、これからぼくといっしょに諏訪町のほうへ行くことにしては。」

諏訪町とは、隼太が宿のあるところだ。弟の中学生と二人して二階を借りている宿のことだ。そこから隼太はある大きな銀行の経理部へと勤めにかよっていた。この「諏訪町」がおせんを驚かした。隼太はなお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

も言葉を継いで、
「実は、今夜は弓夫（隼太の弟）もいっしょに連れて来ようと思ったくらいです。おせんさんが諏訪町へ来てくだすったら、あの弓夫もよろこびましょう。あれも待っていましょう……」
諏訪町へ――まったく、それはおせんが思いがけないことであった。
「どうです、これからいっしょに行こうじゃありませんか。二人して結婚ということを考えようじゃありませんか。」
「ええ。」
このおせんの「ええ」がまた隼太をも驚かした。
歩けば歩くほど希望がわいた。上野の広小路の方角に見える町の灯は池の空に映って、遠いところにある何かのしるしのように二人の心を誘った。思わずおせんは隼太のそばに近く寄り添って、遠い町の灯の見えるほうへと足早に歩いた。
「隼太さん、これからすぐにですか。」

こんな反省がおせんの胸へ来た。ようやく彼女は平素の我に帰って、家のほうに自分を待っているおばあさんのことを隼太に話した。あのおばあさんが風邪の気味でいることを話した。父も郷里のほうへ出かけた留守の時であることを話した。
「おばあさんが風邪のなおるまで待ってちょうだいね。」
とおせんは思い直して言った。
人通りのすくない山下まで歩いて行くと、おせんはもう家のほうへ引き返すことを考えねばならなかった。二人は夜の上野の森に添うて、七軒町の方角へ町を一回りすることにした。行く先には、明るい道と、暗い影とがあって、そのたびに二人の手はつながれたり、離れたりした。おせんはまた、そのつなぎ合わせた手を通して、どうにもならないような行きづまった境涯から自分を救い出しに来てくれた隼太の心づかいを感じた。別れてから三年にもなる月日の間、そんなに長く自分を待っていてくれた隼太の誠意をもしみじ

みうれしく感じた。
「おせんさん――今、小づかいはある？　家を出るにしても、電車賃もないようなことじゃしようがないでしょう。」
と隼太は言って、用意して来た五円ばかりの金をおせんの手に握らせた。
「家を出る時は手紙を下さい。何も持たないで出て来てください、残しておいて悪いと思うようなものがありましたら、小包みにでもしてぼくの宿まで送ってよこしてください。」
こんな打ち合せをもしておいて、七軒町の電車通りまでもどって来たころに、隼太はぷいと別れて行った。
「じゃ、さようなら。」
思いきりのいい隼太が残しておいて行った言葉はそれだ。
翌日からおせんはもう別の人であった。彼女は家にいてかいがいしく立働く自分をおばあさんや弟たちのそばにも、台所にも、留守にしておいて行った父の部屋にも見つけた。父の部屋というは、離れのように庭へむいた六畳ばかりの古い座敷で、障子の外には池の端らしい町の空も見える。そこは父が一年半ばかりも中風を煩って、半分しか手足のきかなかった不自由なからだを横にしていた部屋だ。母がなくなったあとでは、おせんは父の看護婦であり、書記であるばかりでなく、家婢でもあって、病人の食物を台所から運んだり、手足をなでてやったりしたのも、その部屋だ。その父が煩いついたころは、まだ隼太は自由に父のもとへ出はいりしていて、おせんと二人で病人の看護をもした記憶のあるのも、その部屋だ。おせんはあのいとこといいなずけであったころのかずかずの楽しいことをその父の部屋に思い出すこともできた。
おせんが隼太と互に深く相許すようになったのは、一つはこの早いいいなずけの関係からでもあった。母も達者、父もまだずっと元気でいるころに、少年の隼太は栃木のほうから出て来て、父のもとに身を寄せ、

この池の端から学校通いをしていたこともある。父も以前には隼太を愛して、おせんの前でほめてみせたことすらもある。そんなに年も幼く心も柔らかく感じやすかったころに覚えた親しみはずっと大きくなってからも根深く変らずにあった。後になって、長いこと結ばれていたいいなずけの関係が破れたころには、二人はもう離れられないものとなっていた。

かつて隼太はおせんと二人ぎりの時に、こんなことを言ったことがある。

「おとうさんだって、もうそんなに長いことはないでしょう。なんと言ったってぼくらは若い。そりゃ今日は思うようにならないかもしれない。そのかわり、明日はぼくらのものです。」

これが三年前に、隼太の口から漏れた言葉であった。その時のおせんは隼太にだけ聞かせるつもりで、半分冗談の心持もまぜて、

「でも、あのおとうさんはまだなかなか死にそうもありませんよ。」

いとこ同士とあれば、こんな遠慮のないことまで言えた。あれぎり手紙のやりとりも許されなくなり、隼太を見ることもできないようになってしまった。

おせんが思い出したのは、この忘れられない記憶だ。彼女はこれを前の晩の池の端でのひそかな約束に結びつけてみて、心からほほえんだ。

やがて毎年のようにきまりで来る春先の雪が家のまわりをうずめた。思ったより深い雪は、音のしないほど静かに一晩じゅう降りつづけて、翌朝には八寸の余もつもった。庭にある植木という植木の枝は折れそうなほど重い雪をうけて、父の自慢なくちなしなぞは草のように寝た。それほど降りつもったやつがうそのように溶けはじめるころには、家のまわりでおそろしい雪の落ちる音がした。おばあさんはその音を聞きながら、おせんといっしょに父のうわさをした。

「田舎のほうも雪だろうかねえ。」

とおばあさんは、父が行っている地方の町のことを思いやるように言った。

夜が来ると、家の外ではいっそうおそろしい音がした。崖でもくずれるような音がした。屋根をすべる雪のかたまりがくずれ落ちるたびに、おそろしい地響きがした。一つの音が絶えたころには、また他の音が続いた。どうかするとそれがおせんの耳には、遠い山山のほうのなだれでも聞いているようなここちを起させた。

「でも、おばあさん、陽気は割合に暖かいじゃありませんか。」

「宇都宮あたりへはこういう雪は来ない。なんと言っても、これはお彼岸時分の東京の雪だよ。この雪が来ればじきいい陽気になるよ。」

「そうね。わたしたちのところへも、もうじき春が来ましょうね。」

留守居するおせんはおばあさんといっしょに夜おそくまで屋根から雪の落ちる音を聞いた。深夜の空気の中で起るおそろしい音は、床についてからもろくろくおせんを眠らせなかった。彼女は夜中にもその音で目をさました。まくらの上で、隼太のことを思いつづけた。

この雪も消え、ぬかった道もかわき、おばあさんの風邪気もようやくぬけたというころになって、父が郷里のほうから帰って来た。父はひところの大煩いした人とも思えないほどの元気で、

「田舎と東京とではこうも陽気が違うかと思うようだ。日光のほうの山なぞは、まだ真っ白——」

と言いながら、しばらく留守にした家の内を見回した。父はまた、おばあさんやおせんの聞いているところで、

「こんどの旅行は上首尾とは言えないが、まあ、まあ、こんなものでしょう。なにしろ話が大きいんですからね。四割と見ても、四万八千円というんですからね。小さな網で鰍でもすくうようなこととは、すこし話がちがいますからね。」

こんな話をした。池の端での借屋住居で、つましく、つましくと暮らして来たような古い屋根の下では、

父の話はうますぎるようにも聞えた。

もう長いこと、おせんはこの父を見つめて来た。父は三人ある兄弟の中での末の弟であった。郷里のほうで私塾を建てて土地の青年を教育している隼太の親は、おせんの父から言えば一番年長の兄にあたっていた。不幸にも、郷里のほうの石山の払い下げ事件から、この二人の兄弟は次第に文通もしないようになって行った。

伯父と父との苦しい争いは子のいいなずけの破約という形であらわれて来た。栃木県平民、小山俊造で父の通って来たころには、伯父もどれほど父をたよりにしていたかわからないというふうで、たまに上京する時の伯父はきまりで父の家に泊まって、二人で同じ部屋に寝るほどの親しい間がらであった。父が石山の払い下げ事件で有力な官吏と往来するようになってから、この伯父の態度は一変した。父に言わせると、伯父は融通のきかない教育家で、そんなことでこの世智辛い世の中が渡れるものではないと言うのであった。

あの時の父のあっせんで郷里の石山はある個人の手に移ったが、それぎり伯父からの文通も絶えた。

おせんは隼太とのいいなずけの破れた当時、ほとんど一週間も何ものどを通らなかったほどの自分の悲しみを思い起すことができる。それからまた、父のすすめる縁談をすげなく断わってからの暗い月日のことを、いかなる骨折りも父の怒りをやわらげることのできなかったその自分の悲しみを思い起すことができる……

しかし、おせんがあのいとこに約束しておいたように、この行きづまった境涯から自分を救い出すことのできるような家出の機会はそう容易に見あたらなかった。父が帰ってからは、いっそうそれが困難に見えた。親の威厳というものを感ずるばかりでも、そんな自由な行動は、容易に執れそうもなかった。それを思うたびに、おせんは気をあせった。父もなかなかじっとしていない人で、日ごろの夢を実現する時が、目の前へでもやって来たかのように、

「横網の伯父さんを呼びよせて、ひとつ今度の事件を相談しなけりゃならん。」

と言った。横網の伯父とは、おせんが父から言えば、三人の兄弟じゅうでのまんなかにあたる人であった。おせんは父の口ぶりから、「今度の事件」の内容をおぼろげながら知った。それが古い歴史のつきまとった郷里の石山に関した事件であると知った。時も変り、交通の便もひらけ、あの石山がある会社の手に移って、大規模な発掘事業が始まってみると、あんな山地のほうに隠れていた自然の富と無尽蔵な石材とは郷里の人たちの想像以上であったとのこと。かなり大きな金を郷里のために提供してもいいと会社側で言い出したのを見ても、いかに会社の利得の莫大であるかを知り得られようと父は言っていた。そのうちの六割を郷里のために、四割を関係者の手に——それが父の目論見であるらしかった。

「四割と見ても、四万八千円——大きい、大きい。」

父らしい口ぶりだ。

こんな画策に父が余念もなくている間に、おせんは自分の着物やら持ち物やらを人知れず片づけにかかった。茶の間から台所のほうへ通うところに古い箪笥だの鏡台だのを置いてある小部屋があって、そこの押入れの内におせんは隼太からもらったものなぞをたいせつにしまっておいた。隼太の写真も一枚出て来た。三年も前のではあるが、面長な容貌は郷里の伯父に似てよくとれていた。人恋しいおりなぞにはそっと取り出したり、肌身につけてなつかしんだりするうちに、その写真もだいぶ手ずれてしまった。おせんはそういうものだけをひとまとめにして小包みに造った。それを隼太の宿のほうへ先に届けることにした。その他の衣類はいっさい残しておいて行くことにした。

そのうちに、そろそろなまあたたかい、底に嵐を持った風が吹いて来るようになった。やがてもう四月だ。おせんは思いきって家から離れて行く日取りまでも隼太のほうへ書いて送った。その日が近づけば近づくほど不安になって来て、心も落ちつかなかった。どんな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo